

現代版「大山詣り」構想

池田 隆

「コロナ禍による海外渡航制限や県間移動自粛は、わが地元の神奈川県を改めて考える機会となった。延べ十五日かけて大山街道を妻と完歩し、江戸期より続く「大山詣り」の効験を再認識したのだ。とくに「講」組織と結びついた宿坊割烹旅館の健在ぶりには目を奪われた。

だがこの宗教色を帯びたビジネスモデルも今後いつまで続くだろうか。大山・秦野インターチェンジが新たに開通し、車での参拝観光客や登山客は今より若干増えるだろう。だがそれでは月並みの観光地に過ぎない。最大の効験である神仏と絡む心身の健康効果は適度な日数と運動を必要とする。

しかし現代人に昔のような徒歩巡礼を勧めても、不十分な環境整備の下では普及が難しい。ならば昨今流行りの電動アシスト自転車を活用したシステムを整えてみては如何だろうか。

徒歩や通常自転車でももちろん構わないが、起伏の多い土地柄には電動アシスト自転車が非常に有効である。それには安全性と快適性の面から自転車と歩行者用の道路網が必須となる。県央の大山から四方に伸びていた幾筋もの旧大山街道に倣い整備する。さらにその間を補助道で適宜結ぶ。

個人所有の自転車は電車を片道利用する場合などには不便である。所々にレンタルステーションを設け、自由に貸出返却のできるシステムを構築する。電動アシスト自転車の電源としては近くの高速道路の壁に設置した太陽光発電などの自然エネルギーを活用する。

横浜みなとみらい21、一子玉川や南町田などの人気の商業歓楽街、七沢や鶴巻、箱根湯本などの温泉地、小田原や江ノ島、鎌倉の神社・史跡などを専用道路網の主要地点として組み込む。さらに相模川や湘南や三浦半島の海沿いに遊覧船を走らせ、それらとも連携する。

江戸町民が「大山詣り」の帰途には江ノ島や宿場で楽しんだという響に倣おう。県民都民の心身健全化に加え、県内隅々で人々の往来が増え、商店は栄え、地元の農産物水産物への関心は高まり、地方創生の範となるだろう。